



「強く 聡く 美しく」

横中は
愉快だ
宇都宮
UTSUNOMIYA



第8号

— 知性・感性・品性のある横中生を目指して —

令和元年 11 月 29 日 発行

宇都宮市立横川中学校長 矢口 真一

Don't worry about failures, worry about the chances you miss when you don't even try.

— 失敗を恐れるな、挑戦しようとせずチャンスを逃してしまうことこそ恐れよ —

1 年 冒険活動教室

11月7日(木)から3日間、「最高の仲間と最強の絆で忘れられない思い出を」(2組女子生徒作)というスローガンの下、市の冒険活動センターで実施しました。

1日目は登山を行い、互いに声を掛け合いながら4山を制覇しました。2・3日目は学級ごとに野外炊飯や野外活動等に協力して取り組みました。2日目の夜に行ったキャンドルファイヤーでは、厳かな雰囲気の中で儀式を行ったり、ゲームで盛り上がりたりして、思い出に残るものとなりました。実行委員長を中心に事前の計画をしっかりと立て、仲間と協力して過ごした3日間でさらに「絆」を深めました。



2 年 宮っこチャレンジウィーク

11月11日(月)～15日(金)の5日間、2年生が社会体験学習を行いました。生徒は、宇都宮市内100か所の様々な施設や事業で働きながら、自分の能力・適性を探り、働くことの意義や目的について考えを深め、働くことの尊さを実感しました。生徒たちは、緊張しながらも、自分の役割を果たそうと頑張っていました。受入先の方々からは、その頑張りにお褒めの言葉を多数いただきました。生徒には、今回の学びをぜひ今後の生活に生かしてほしいと思います。ご多忙中にもかかわらず、生徒を受け入れていただいた皆様に、心より御礼申し上げます。



合同スポーツ交歓会

11月15日(金)、宇都宮市体育館ブルックスアリーナで開催され、市内中学校の特別支援学級の生徒がスポーツを通して交流を深めました。当日、生徒たちは様々な競技に臨み、本校から参加した生徒9人も、勝利を目指して一生懸命に取り組みました。競技には各中学長も参加して生徒と交流し、楽しい時間を過ごしました。どの生徒からも、充実した表情が見られました。



横川地区まちづくり懇談会

11月21日(木)、横川地区市民センターで開催され、佐藤栄一 宇都宮市長が市政について参加者と直接対話をされました。今回は、本校から2年の生徒3名(生徒会長1名、副会長2名)が参加し、横川地区の文化遺産の活用や安全のためのミラーや街灯の増設について意見を述べました。

佐藤市長からは、意見を生かした取組を積極的に進めていくという回答をいただきました。久しぶりの中学生の参加に市長は喜んでおられ、また地域の方々も生徒の堂々とした態度に感心していました。



各種英語スピーチコンテストで、日頃の成果を大いに発揮しました！

高円宮杯全日本中学校英語弁論大会栃木県大会 優秀賞 3年女子

栃木県中学校英語スピーチコンテスト II 部(帰国子女の部) 優秀賞 3年女子

宇河地区中学校英語スピーチコンテスト I 部 優秀賞 2年女子 3年 女子 優良賞 1年 女子

II 部(帰国子女の部) 最優秀賞 1年 男子 3年 女子 優秀賞 1年 女子 2年 男子

Rugby World Cup (ラグビーワールドカップ) 2019

Japan show world their defiance and skill in face of typhoon destruction

ー 日本が台風の破壊に直面し果敢な抵抗と技を見せる ー



日本中が熱狂したラグビーワールドカップ日本大会は、11月2日(土)に南アフリカの優勝で幕を閉じました。日本代表のブレイブ ブロッサムズ (Brave Blossoms) は、予選リーグを4戦全勝で勝ち抜いて初めて決勝トーナメントに進出しました。優勝した南アフリカには3-26で敗れましたが、計5試合の素晴らしい戦いぶりで日本中に感動を与えてくれました。上記のタイトルは、日本が決勝トーナメント進出を決めたスコットランド戦について、イギリスの大手新聞 The Guardian (ガーディアン) の Andy Bull (アンディ・ブル) 記者が書いた記事のタイトルです。記事の内容が美しく詩的で裏方にも光の当たる素晴らしい記事だと話題になりました。40年来のラグビーファンである私も、ワールドカップを大いに楽しみ、本記事にとっても感銘を受けたので、原文(英語)ではなく日本語訳(一部省略)になりますがご紹介します。

「黙とうは、1分にも満たない短いものだった。しかし、そこには過去に例のない状況で行われる試合に対する、渦を巻き、衝突し、矛盾した感情の全てがあった。台風ハギビスが日本を吹き抜けたわずか数時間後、周囲は水であふれ、救出作業も終わっていないければ、修復作業など始まっていない。黙とうが、一体誰に向かって、何人の犠牲者へ捧げられたのかも分からない。なぜなら、被害者の数は全く確定していなかったのだ。明け方は4人とされていた死傷者数は9人に増え、試合開始時には24人になった。そしてハーフタイムには26人、試合が終わり少し経った頃には28人へと増えていった。

そのような状況下、試合を実施すべきだったのか。世界ラグビー協会は、実施決定の判断を、日本の組織委員会に委ねた。なぜこんな状況でスポーツをするのか。なぜスポーツを見るのか。未だに多くの人が行方不明で、堤防は壊れ、川はあふれ、会場のある横浜から東へ26kmしか離れていない川崎では100万人が避難し、50km北に位置する相模原では、土砂災害でなくなった人の正確な数さえ把握できていない状況であったのに。災害のある種の清涼剤としてなのか、日常を取り戻すためなのか、台風への挑戦のためなのか。日本は試合の実施を決めた。ホスト国としての誇りでもあり、自分たちはできるということを世界に証明したかったのだ。

横浜の被害が悪化しなかった理由の一つは、鶴見川からあふれ出る洪水流域の真ん中にスタジアムが建設されていたからだった。スタジアムは高床式で、水はその下を流れるようになっており、スタジアム自体が街の災害対策の柱だった。そして今や、スタジアムは精神的な柱でもあった。組織委員たちは、台風が去ったらすぐに動き出せるよう、土曜日の夜はスタジアムに泊まり込んだ。明け方には整備班が現地に入って更衣室から水を吸い出し、消防隊は全ての機械設備の点検を3回行い、ピッチに流れ込んだ泥やごみを洗い流した。

日本では、このワールドカップにおける「おもてなし」とは何かという議論が何度もなされてきた。私も正確に訳すことはできないが、この国で4週間を過ごして、ばく然とだが理解したかもしれない。それは、客を喜ばせるために全力を、いやそれ以上を尽くすということだ。しかし、彼らの「おもてなし」は、私たちの予想をはるかに上回っていた。試合前、多くの人が全くの勘違いをしていたのは、そのせいかもしれない。日本人はみんな、この試合が中止になり、過去に勝ったことがないスコットランドとポイントを分け合うことを望んでいる、などという勘違いを。中には、スコットランドへの妨害行為という陰謀論まで唱える者もいた。スコットランドラグビー協会の最高責任者、マーク・ドッドソンも完全な勘違いをしていた。日本の決定によりスコットランドが被害を受けることがあれば、法的措置を検討するなどと言い放った。これは、日本人が試合に勝つための覚悟を決めたことへの恥ずべき大きな勘違いであった。

黙とうに続いて、日本の国歌「君が代」が流れ、会場中の人々による国歌斉唱は、感動的であり荘厳だった。選手を鼓舞する歌声が、大きく、さらに大きく、街中に響き渡るほどだった。あの瞬間、スコットランドが対面しているのは、ラグビー文化をもたない極東の島国ではなく、強大なサポーターをもち、己の真価を世界に証明しようとする覚悟をもったチームだということを思い知ったのだった。

前半の30分間、日本は魔法がかかったような、激しくどう猛で集中したラグビーを見せた。次の対戦相手である南アフリカも含め、トーナメントに残った全てのチームを凌駕する程のラグビーを。スコットランドは善戦したが、より頑強で鋭く、俊敏であった日本に完全に圧倒された。日本のラグビーファンたちは、今なら何でもできる、どこが相手でも倒せる、と信じているだろう。そして、日曜日の夜に日本チームが偉業を成し遂げた今、日本人だけではなく世界中の誰もが、同じように思っている。」